



213

水素を燃料に地道に推進

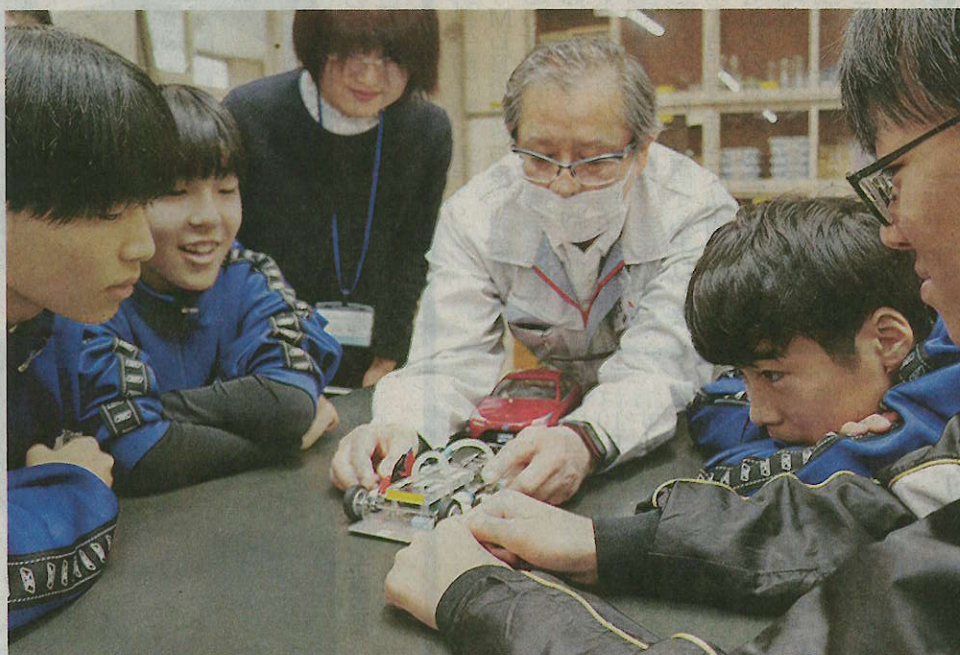
水素で走る燃料電池車(FCEV)をミニカーで再現する実験教室が11月29日、豊田市九久平町の松平中学校であった。開いたのは豊田市とトヨタ自動車。官民連携で水素社会の構築を進めるなか、市民への普及活動を加速させている。

「燃料電池って、みんな知っているかな」。中学2年生30人ほどが集まった教室。トヨタ自動車の溝淵豊さん(55)が問いかけると、生徒4、5人がばらばらと手を挙げた。「認知度はまだまだ低いんです」と溝淵さんはつぶやく。

燃料電池は電気をためる蓄電池とは異なり、水素と酸素を化学反応させて発電する装置のことを指す。発電効率が良いことや、発電時に水しか出さないことから、二酸化炭素を排出しな

エネルギーをみんなに そしてクリーンに

豊田市とトヨタ自動車



模型の車体に燃料電池を組み込むトヨタ社員と生徒たち＝豊田市九久平町で

近藤一吹さん(14)は「燃料電池の仕組みはもちろん、車づくりの難しさも体験できた」と喜んだ。

「土地柄、ものづくりに対する関心は高いはず。併せて子どもたちには環境問題にも意識を向けてほしい」。そう願うのは市未来都市推進課の清水智哉課長(49)。市は2010年からFCバスの導入など、水素社会の推進に力を入れてきた。ただ、市民の理解はまだ道半ばだという。

市は、国が促進する「カーボンニュートラル」(温室効果ガス排出実質ゼロ)の50年実現に向け、本年度中に「水素社会構築戦略」を策定する予定。松平中での実験教室は戦略を構築するなか、水素活用への機運を醸成するための施策だ。

今後も市は子どもを中心に、市民の理解促進に力を入れていく。車のまちからつくる、環境に優しい社会。ゆっくりとその車輪は回り始めている。

(大谷津元)

い次世代エネルギーとして

各業界が注目。トヨタでは1990年代からFCEVの開発を進めてきたという。

教室ではそんな燃料電池の良さをトヨタ社員が紹介。同社が開発したFCEV

「ミライ」の図を使った燃

料電池の解説には、生徒も興味深そうに見入っていた。すると溝淵さんらが

「ミライ」の模型を手になげて模型の車輪を回転させた。車が動き始めると生徒たちは「すごい」と笑顔。